

# 鄧石如の楷書に関する一考察

鎌田美里

## 一、問題点の所在

鄧石如（清・乾隆八—嘉慶一〇、一七四三—一八〇四）は、名を琰、字を石如または頑伯という。安徽省懷寧の人で、皖公山下に生まれたことから、また完白山人と号した。

包世臣は「国朝書品」<sup>①</sup>において、

平和にして簡静、適麗にして天成なるを、神品と曰う。

醞釀、迹無く、横直、相い安んずるを、妙品と曰う。

として、神品にただ一人鄧石如の隸書及び篆書、妙品上に一人鄧石如の分書及び真書をあげる。また「論書十二絶句」<sup>②</sup>では、

懷寧の布衣鄧石如頑伯、篆・隸・分・真・狂草、五体兼工にして、一点一画、奮う若く搏つ若し。蓋し武徳自り以後、間気の鍾まる所にして、百年来、書学、能く自ら樹立する者、或いはともに参ずる莫く、一時一州の美を専にするを得る所に非ざるなり。

と最高の評価を下している。

包世臣は篆・隸を神品に、分・真を妙品に評したが、これらの体のうち、篆（篆書）・隸（隸書）・分（八分）については、包世臣、康有為、呉育ともに周、秦、漢、三国碑を学んだとしている<sup>③</sup>。しかし、真（楷書）の出自においては、各諸家の見方に大きな相違があるようである。

本稿では、鄧石如の学書環境という視点から、従来の説を検討し、真（楷書）

に対する一つの仮説を立ててみたい。

鄧石如の楷書の出自については大別すると、

① 南北朝碑を学んだ

② 唐碑を学んだ

③ 南北朝碑、唐碑ともに学んだ

とする三つの見方がある。

南北朝とするのは、包世臣、康有為、西川寧氏である。三氏は、南北朝時代としては共通であるが、王朝・古典で異なる。

康有為は、以下のように述べる。

鄧頑伯の楷法は、蒼古質朴にして、商彝漢玉に対するが如し。……また南北朝を臨せること最も夥し。故にその氣息規模、自然高古なり。<sup>④</sup>

また「尊碑第二」では、南北朝の碑それぞれについて説明する。南朝の碑（六朝碑）については、

其の隸楷は専ら六朝の碑を法として、古茂渾朴、実に汀洲と分隸の治を分かち、而して碑法の門を啓く。

と述べ、北朝の碑（北碑）については、

懷寧の則ち崔敬邕より得るが若きなり。<sup>⑤</sup>

と、具体的な碑銘として北魏の崔敬邕墓誌をあげている。

西川氏は、同じ南北朝時代ではあるが、北朝の碑のみをあげる。

東魏の敬史君碑や北齊の劉碑造像などどこか似たようなこのじっくりした風味……<sup>⑥</sup>

西川氏が指摘される東魏・北齊は、康有為の示す時代より少し下る。

包世臣も二氏と同様、南北朝時代ではあるが、六朝碑を学んだとの見方をする。山人篆分を移して以て今隸を作る。瘞鶴銘・梁侍中石闕と法を同じうせり。

（包世臣「完白山人伝」）

この瘞鶴銘・梁侍中石闕は共に梁代の碑である。梁は北魏・東魏と同時期の王朝であり、三氏が示す時代は、ともに南北朝時代後半と見ることが出来る。

これらに対して、時代を下った②の唐碑を学んだとするのは松井如流氏である。氏は①の南北朝碑説を否定され、唐人の楷書、具体的には虞世南の孔子廟堂碑をあげる。

王潜剛は、『清人書評』において、「完白の真書は述聖頌に得たる者多しと為す」と述べ、「初め六朝人の書を変じてしかも欧褚顔柳諸家の拘束を受けず」と、六朝碑・唐碑を学んだとの見解に立つ。ここで興味深いのは、王氏が、欧（歐陽詢）褚（褚遂良）顔（顔真卿）柳（柳公権）といい、虞（虞世南）をあげていないことである。

この他に用筆の面から、包世臣、趙之謙が篆隸の用筆をもって楷書を作したとする。

これらをまとめると「表一」のようになる。

「表一」

		包世臣	康有為	趙之謙	王潜剛	西川寧	松井如流
南北朝碑	北碑		○		○	○	×
	六朝碑	○	○		○		×
唐碑			×				
篆隸の用筆		○		○			○

このように、鄧石如の楷書の出自に対して、諸家の見解が異なる。そこで以下に字例をあげ、具体的に北碑、六朝碑、唐碑等と比較し検証する。

## 二、検証

鄧石如の楷書作品としては、次の十三作品を対象とする。

・ 読書楽楷書屏	四十歳	(以下、読書楽と略称)
・ 楷書銘詞屏	四十歳前後	(以下、楷書銘と略称)
・ 楚辞の九歌	四十歳前後	(以下、楚辞と略称)
・ 贈也園楷書冊	四十四歳	(以下、贈也園と略称)
・ 贈曹儷筓四体書屏	四十八歳	(以下、贈曹と略称)
・ 滄海日楷書聯	五十四歳	(以下、滄海日と略称)
・ 長慶集	五十四歳前後	(以下、雪斎と略称)
・ 雪斎清境詩楷書	五十五歳前後	(以下、雪斎と略称)
・ 真書冊	五十七歳	(以下、樂志論と略称)
・ 楷書樂志論軸	五十七歳	(以下、自書と略称)
・ 自書四体書屏	五十九歳	(以下、泰山と略称)
・ 楷書泰山嵩嶽詩軸	六十二歳	(以下、七言聯と略称)
・ 楷書七言聯	六十二歳	(以下、七言聯と略称)

大まかに鄧石如の楷書を二期に分類する。ただし、

ただ大まかにいえば、嘉慶に入る前後で書風に差があるようである。嘉慶以前は、偏平さのかった結構と、粘りをおびたつややかな線質をもつ。嘉慶九年の「滄海日對聯」作になると、この作は、腰の強い筆を用いているようであるが、一結体は狭長となつて、冷厳さをおびた気象がみえている。

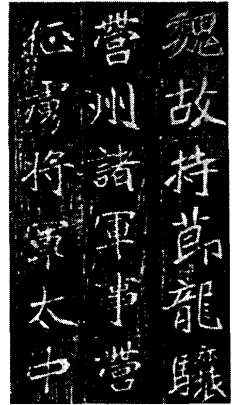
と西林昭一氏は、書風という観点から嘉慶前後（鄧石如五十四歳）に鄧石如の楷書の変化を見る。しかし筆者は、学書環境の視点から畢沅の幕友時（鄧石如四十九歳から五十一歳）をその境と考える。その理由として、嘉慶以前の作品は四十八歳まで遡り、その間に書風に変化が生じていること、畢沅の幕府が学書環境としては非常に優れていることの二点をあげたい。「図一」は畢沅時を境として鄧石如の楷書三十八字を年代順に並べたものであり、この表から前後期の書風に変化が生じていることがわかる。

「図二」は、鄧石如の楷書とそれに対応する上述の古典とを対比させたもので

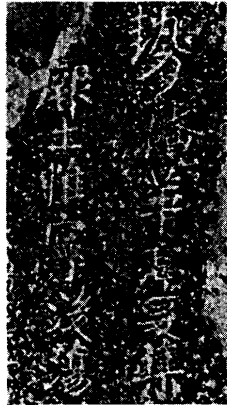
ある<sup>①</sup>。鄧石如の楷書については、各文字につき四例（前期・後期それぞれ二例ずつ）を挙げた。古典については、右から崔敬邕墓誌、瘞鶴銘、敬史君碑、述聖頌、孔子廟堂碑をとりあげ、比較的共通して見られる文字五十字を抽出し、その中から、より特徴を示す二十字を選出したものである。

出自の不明な文字については、羅振鋆・羅振玉「増訂碑別字」、羅振玉「碑別字拾遺」、羅福葆「碑別字統拾」（『偏類碑別字』）所収。以下それぞれ「別字」「拾遺」「統拾」と略称する）、伏見冲敬編『中国書道大字典』（角川書店、一九七四）に依拠した。

崔敬邕墓誌



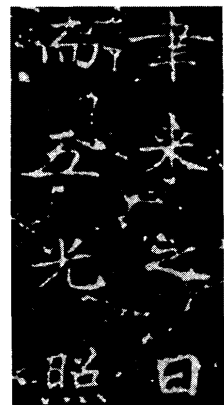
瘞鶴銘



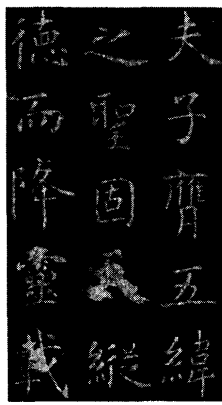
敬史君碑



述聖頌



孔子廟堂碑



後期	前期		
月	月	月	月
七言聯	泰山	滄海日	楚辭
未	未	未	未
真書冊	雪齋	長慶集	贈也園
雲	雲	雲	雲
自書	長慶集	滄海日	贈也園
華	華	華	華
七言聯	滄海日	楚辭	說書樂
大	大	大	大
真書冊	雪齋	楚辭	說書樂
其	其	其	其
真書冊	長慶集	贈也園	楷書銘
地	地	地	地
樂志論	真書冊	楷書銘	說書樂
如	如	如	如
樂志論	真書冊	滄海日	說書樂
此	此	此	此
自書	真書冊	雪齋	說書樂
流	流	流	流
自書	長慶集	贈也園	
石	石	石	石
真書冊	長慶集	贈也園	
齋	齋	齋	齋
雪齋	滄海日	說書樂	
也	也	也	也
真書冊	雪齋	楷書銘	
事	事	事	事
泰山	真書冊	贈曹	
易	易	易	易
真書冊	雪齋	贈曹	
上	上	上	上
樂志論	楚辭	楷書銘	
無	無	無	無
真書冊	楷書銘	說書樂	
何	何	何	何
真書冊	說書樂		
德	德	德	德
真書冊	楷書銘		

後期	前期		
以	以	以	以
泰山	泰山	樂志論	真書冊
之	之	之	之
樂志論	真書冊	雪齋	長慶集
人	人	人	人
泰山	樂志論	真書冊	雪齋
有	有	有	有
七言聯	真書冊	雪齋	長慶集
天	天	天	天
泰山	自書	樂志論	真書冊
山	山	山	山
泰山	自書	真書冊	雪齋
不	不	不	不
七言聯	自書	樂志論	真書冊
高	高	高	高
樂志論	真書冊	長慶集	贈曹
者	者	者	者
樂志論	真書冊	長慶集	贈也園
入	入	入	入
真書冊	長慶集	贈曹	贈也園
鳴	鳴	鳴	鳴
自書	長慶集	贈也園	楚辭
樂	樂	樂	樂
真書冊	長慶集	贈也園	楚辭
四	四	四	四
自書	長慶集	贈也園	楚辭
清	清	清	清
真書冊	雪齋	長慶集	贈也園
來	來	來	來
樂志論	真書冊	長慶集	贈也園
明	明	明	明
七言聯	泰山	真書冊	贈曹
風	風	風	風
泰山	自書	樂志論	楷書銘
時	時	時	時
七言聯	樂志論	長慶集	贈曹
能	能	能	能
真書冊	真書冊	真書冊	長慶集

備考	孔子廟堂碑	述聖頌	敬史君碑	瘞鶴銘	崔敬邕墓誌	後期		前期		
										天
						泰山	樂志論	楷書銘	說書樂	
										山
						泰山	滄海日	贈曹	說書樂	
										之
						樂志論	長慶集	贈也園	說書樂	
										以
						樂志論	真書冊	贈曹	楷書銘	
										不
						七言聯	樂志論	贈曹	說書樂	
										事
						泰山	真書冊		贈曹	
										華
陳叔榮墓誌						七言聯	滄海日	楚辭	說書樂	
										銘
比丘洪宝造像									楷書銘	
										風
盧貴蘭墓誌						泰山	樂志論	楷書銘	說書樂	
										有
						七言聯	雪齋	楚辭	說書樂	
										時
						七言聯	樂志論	贈曹	贈也園	
										大
						真書冊	雪齋	楚辭	說書樂	
										未
						真書冊	長慶集	楚辭	贈也園	

備考	孔子廟堂碑	述聖頌	敬史君碑	瘞鶴銘	崔敬邕墓誌	後期		前期		
										流
						自書	長慶集	贈也園		
										無
程哲碑							真書冊	楷書銘	說書卷	
										靈
說文解字 禮器碑								楚辭		
										年
							真書冊			
										者
						樂志論	長慶集	贈也園	說書卷	
										能
障福寺碑 李顯族造像						真書冊	長慶集	贈也園		
										鳴
郭頌墓誌						自書	長慶集	贈也園	說書卷	

## 1、「天」

二本の横画では、前期は上部を右上に反らせ、下部を伏せるが、後期はともに伏せる。

古典では、述聖頌のみ二本の横画を伏せ、他の四種は二本ともに右上に押し上げる。

総じて、前期は結体・用筆ともに敬史君碑に近く、後期は述聖頌の体に類似するところが多い。しかし用筆では相違を見る。

## 2、「山」

前期に見る左右の縦画をほぼ線対称とする特徴は、瘞鶴銘と共通し、後期の「滄海日」は述聖頌・孔子廟堂碑の体に近い。後期では重厚な線、篆隸の用筆が見られる。

## 3、「之」

前後期ともに右払いを上部の横画より長く作る。これは南北朝碑にはあまり見られない特徴である（南北朝碑は上部の横画をほぼ同じ長さに作る）。

前後期の体は述聖頌・孔子廟堂碑に近似する。

## 4、「以」

前後期を通じて二種の体が見られる。一方は絵画数四画からなり、もう一方は五画からなる。

前期の「楷書銘」、後期の「真書冊」は結体・用筆ともに瘞鶴銘に近い。「贈曹」

## 5、「不」

結体では、前期の「読書楽」のみが一画目を右上に反らせ、最終画を連続させ

る。これは古典以外の要素である。他の三例は左右の斜画（左を長く作る）、縦画との交差の仕方から敬史君碑に類似する。用筆では、後期に篆隸の筆法が見られる。

## 6、「事」

前後期で三つの変化を看取できる。

①縦画の終筆を前期は左上に押し上げ、後期は左下へと払う。

②「ヨ」について、前期は三本目の横画を長く作り（「ヨ」）、後期では二本目を長くする（「ヨ」）。

③後期では用筆に篆隸の影響が見られる。

前期の「ヨ」はいずれの古典にも類似を見ない。後期は縦画の終筆に相違はあるものの、述聖頌の体に近い。

## 7、「華」

前後期とも古典の体とは異なる。相違点は以下の二点。

①古典では「卍」とする部分を「茲」「茲」と作る。

②九画目からの「卍」を前期の「楚辞」は「𠂔」、「滄海日」は「卍」と作る。

「茲」とするのは魏吐谷渾璣墓誌（「別字」）の一例、「茲」では魏冀州刺史元寿安墓誌（「別字」）、齊造七佛宝堪記（「別字」）、唐廋士梁凝達墓誌（拾遺）、魏宕昌公暉福寺碑（統拾）の四例、「𠂔」では齊造七佛宝堪記（「別字」）、隋の陳叔榮墓誌、北魏の司馬頤姿墓誌、北魏の王誦墓誌（《中国書道大字典》）があり、うち隋の陳叔榮墓誌は点画の作りが「楚辞」に酷似する（図二、備考「華」参照）。「卍」の体は確認出来ない。

用筆では、後期篆隸の筆法が見られる。

## 8、「銘」

偏に注目すると、鄧石如は「壺」を「壺」とし、縦画を横画から突き出すが、古典では「壺」「壺」に作る。「壺」の体は、宋の劉懷民墓誌、東魏の比丘洪宝造像に確認出来る（『中国書道大字典』）。うち、東魏の比丘洪宝造像は鄧石如の体と酷似している（図二、備考「銘」参照）。

## 9、「風」

前期では、「虫」の部分を「虫」と作る。この体は古典には見られない。これは東魏の李顕族造像、盧貴蘭墓誌、隋の明質墓誌、晋の司馬芳殘碑の四碑に見ることが出来る（『中国書道大字典』）。うち東魏の盧貴蘭墓誌は前期の体に酷似している（図二、備考「風」参照）。後期では、正面を向いた結体、二画目の横画の特徴など述聖頌・孔子廟堂碑に類似する。

## 10、「有」

前期は一画目を「フ」と作り、縦画は横画の中心よりを、後期は左よりを通る。「フ」は、北魏の中岳崇高靈廟碑、石函蓋銘、呉の谷朗碑に見られるが、前期の体とは類似しない（『中国書道大字典』）。これはおそらく隸書から来しているものと考えられる。

前期は古典以外であり、後期は孔子廟堂碑に類似する。（用筆において、「七言聯」では逆筆を使用し、隸意を思わせる筆法となっている。）

## 11、「時」

旁に注目すると、前期は三本の横画のうち最下部が最も長く、後期では二本目を長く作る。前期の特徴は、北魏の鄭羲下碑、高貞碑、中岳崇高靈廟碑、元思墓誌、唐の等慈寺碑の五碑に見られるが（『中国書道大字典』）、前期の体とは類似しない。

用筆では後期の「七言聯」に篆隸を思わせる筆法が見られる。

## 12、「大」

一画目に注目すると、前期の「読書樂」に「10、有」で論じた始筆部の筆画が認められる。この独特の筆画は古典、「偏類碑別字」、「中国書道大字典」いずれにも見られない。

前期は左払いの特徴から崔敬邕墓誌・敬史君碑に類似を見、後期は述聖頌・孔子廟堂碑の体に近い。

## 13、「未」

前後期ともに二種の体を用いる。一つは左右の斜画を二つの点に作り、もう一つは左右の斜画とする。

古典では、瘞鶴銘が二つの点とし、他の古典はいずれも左右の斜画である。

前期の「贈也園」及び後期の「長慶集」は瘞鶴銘に酷似し、残りの二例は述聖頌・孔子廟堂碑の体に近い。

## 14、「流」

前期では「大」を「E」と作る。この体は古典、「偏類碑別字」、「中国書道大字典」にも字例を見ない。後期では瘞鶴銘・敬史君碑にみる特徴と共通している。

## 15、「無」

前後期とも古典とは相違がある。特に崔敬邕墓誌、敬史君碑とは明らかに異なる。

前期は下部の四つの点が連続し、後期は一・二画目を「ク」と作る。これは北魏碑・東魏碑・梁碑に見られるものである（『中国書道大字典』）。

前期の体は東魏の程哲碑に類するところが多く（図二、備考「無」参照）、後期



の体も東魏碑に近い。

### 16、「靈」

一例のみであるが、古典とは明らかな相違がある。古典はいずれも下部を「巫」とするが、鄧石如は「王」と作る。この特徴は魏杜安遷造像記（「別字」）一例に見られるが、鄧石如の体とは異なる。これはおそらく篆隸から来たものと推察される。『篆隸字典』（赤井清美編、一九八五）によると、説文解字及び礼器碑にこの特徴を看取する（図二、備考「靈」参照）。

### 17、「年」

これも一例のみであるが、古典とは明らかな相違をもつものである。鄧石如は二画目を「フ」とし、古典はいずれも「一」とする。また横画について、敬史君碑・孔子廟堂碑は三本、崔敬邕墓誌・述聖頌は四本に作るが、鄧石如は五本とする。

『偏類碑別字』、『中国書道大字典』、『篆隸字典』いずれにも鄧石如の体に一致する字例は見られない。

### 18、「者」

今回鄧石如の作品から「者」について、前期三例、後期三例の計六例を確認したが、うち最初の二例は「日」の上部に一画多く作る。

前期は古典以外であり、後期は孔子廟堂碑に類似する。

### 19、「能」

前後期併せて四種の体を用い、いずれも古典とは相違がある。「図二」にはより特徴的な三例を載せた。隣の「巨」について、前期は「長」とし、縦画を連続させ上部を「土」、下部を「𠂔」と作る。後期では「長」「𠂔」「巨」の三種を用い、

いずれも縦画は連続させず、上部を「土」「上」「匕」、下部を「𠂔」「𠂔」「匕」とする。

前期の「長」は『偏類碑別字』、『中国書道大字典』にも字例を見ない。後期の「長」に類似するのは北魏の暉福寺碑があり、「長」に類似するものに東魏の李顕族造像がある（図二、備考「能」参照）（『中国書道大字典』）。

### 20、「鳴」

旁において、前期は古典との相違が見られる。

①「鳥」の四つの点画が連続して一本の点画となっている。

②「鳥」の一画目を「ク」と作る。

四つの点画を連続させるものでは北魏の郭顕墓誌があり、この碑は「読書楽」との類似点も多い（図二、備考「鳴」参照）（『中国書道大字典』）。「ク」の字例は『偏類碑別字』、『中国書道大字典』いずれにも見られない。

前期は北魏の郭顕墓誌に類似したことから、北魏を学んだ可能性が考えられ、後期の体は孔子廟堂碑に類似している。

以上二十字にわたり検証を行った。総括したものを「表二」に示す。

「表二」

	前期	後期
1 天	敬史君碑	述聖頌（篆隸の筆法）
2 山	瘞鶴銘	述聖頌・孔子廟堂碑（篆隸の筆法）
3 之	述聖頌・孔子廟堂碑	述聖頌・孔子廟堂碑
4 以	瘞鶴銘／古典以外	瘞鶴銘／古典以外
5 不	古典以外／敬史君碑	敬史君碑（篆隸の筆法）
6 事	古典以外	述聖頌（篆隸の筆法）

7	華	古典以外(隋碑に類似)	古典以外(篆隸の筆法)
8	銘	古典以外(東魏碑に類似)	
9	風	古典以外(東魏碑に類似)	述聖頌・孔子廟堂碑
10	有	古典以外	孔子廟堂碑(篆隸の筆法)
11	時	古典以外	古典以外(篆隸の筆法)
12	大	崔敬邕墓誌・敬史君碑	述聖頌・孔子廟堂碑
13	未	瘞鶴銘・述聖頌／孔子廟堂碑	瘞鶴銘・述聖頌／孔子廟堂碑
14	流	古典以外	瘞鶴銘／敬史君碑
15	無	古典以外(東魏碑に類似)	古典以外(東魏碑に類似)
16	靈	古典以外(篆隸の結体)	
17	年		古典以外
18	者	古典以外	孔子廟堂碑(篆隸の筆法)
19	能	古典以外	古典以外(北魏碑、東魏碑に類似)
20	鳴	古典以外(北魏碑に類似)	孔子廟堂碑

ここから、前後期の相違が明瞭に見て取れる。

古典では、前期は瘞鶴銘・敬史君碑と東魏碑に類似することが多い。敬史君碑は東魏の碑であるから、前期の特徴として、瘞鶴銘(南朝梁碑)・東魏碑(北朝碑)をあげることができる。これに対し後期では、孔子廟堂碑・述聖頌(共に唐碑)の割合が非常に高くなる。

文字の特徴では、前期は偏平で丸みを帯びた体で、特に点画・転折部に大きな特徴を見せ、点画の連続による線化、篆隸用筆のなごりを思わせる筆画、南北朝碑に見られる文字の使用等があげられる。しかし後期になると、全体に角張った体、明瞭な点画、篆隸の筆法等が見られるようになる。

このことから、前期は主に南北朝の碑を学び、畢沅の幕府において、唐にまでもその学書範囲を求めた、ということが推察される。また先に学んだ篆隸の影響

も見逃せない。

### 三、学書の背景

鄧石如の楷書は、篆隸のように伝記資料等からその学書を知ることはできない。しかし今回の検証により、篆隸の影響を色濃く受けながら、前期においては主に南北朝碑を、後期においては唐碑をその学書対象としたという考察結果に至った。以下、その背景について考えてみたい。

鄧石如の楷書で、彼が確実に目にしたといえるものは瘞鶴銘のみである。乾隆四十六年(一七八二)、鄧石如三十九歳の「意与古会」朱文印の側款に以下のよう  
な記述がある。

此の印、南部の畢蘭泉の為に作る。蘭泉頗る豪爽なり。詩文を工みにし、画竹を善くす。江の南北の人、皆な嘖々として之を称す。去冬、余と邗上に遇う。余の石に篆するを見て、之を欲す。余、吝んで与えず。乃ち怏々として去る。焦山、南部江中に突兀たり。華陽真逸の正書瘞鶴銘は古今に冠たるの傑なり。余、山に遊ぶ時、睇視すること良に久し。未だその搨本を獲ざるを恨む。乃ち怏々として返る。秋の初め、蘭泉邗を過り余を訪う。余、微しくその意を露わす。遂に家に蔵する所の旧搨を以て余に贈る。爰に急いで此の印を作り、之に謝す。蘭泉の喜知るべし。而して、余の喜びも亦知るべきなり。向の其の下に徘徊して摩挲して得ざる者は、今几案の間に在るなり。向の心悅して神慕する者は、今絃若々として、綬累々として襟袖の間に在るなり。云胡ぞ、喜ばざるや。向の互に相い怏々たる今俱に欣々として没すべからざるなり。故に之を石に志すと云う。乾隆辛丑歲八月、古浣子鄧琰。并せて広陵の寒香僧舎に識す。

この記述より、鄧石如が瘞鶴銘の拓本を手に入れたことがわかる。瘞鶴銘を得たのは鄧石如三十九歳、彼の楷書作品が四十歳より始まることから、学書時期は

見事に一致している。よって、瘞鶴銘を学んだ可能性が高いと考える。

このほか推測の域を出ないものであるが、学書したと言われる古典についての背景を考察してみたい。

まず崔敬邕墓誌について。この碑は、康有為が『広芸舟双楫』の中で評価する碑の一つである<sup>15</sup>。足立豊氏は、この碑について次のように述べる。

瘞鶴銘・崔敬邕は線に丸みあるところがいくぶん似通ったものであるが完白の四体書中の楷がこれに近いかともいうのであろうか。できあがったものの姿だけを見ると我々にはあまりなっとくできない<sup>16</sup>。

氏が述べるように、結体にはほとんどその類似性をみない。ただ用筆において、直角に近い打ち込みと逆筆などは類似するところもある。しかしこれが崔敬邕墓誌の影響であるかどうかは疑問である。

東魏碑については、西川氏が具体的に名を示された敬史君碑よりその大部分を集字したが、この時代の影響と思われる表現を多く確認した。特に前期においてそれは顕著である。結体では「天」「不」「有」「大」「銘」「風」「流」「無」「能」が類似し、うち「銘」「風」「無」「能」は他の時代にあまり見られない体であった。用筆においても、角張らない丸みを帯びた筆画など類似点が多く見られた。前期の学書環境である梅家には、皇室からの金石善本が揃っていたというし、その中に東魏碑があつたとも推測できる。おそらく東魏碑は学んだといつてよいだろう。

述聖頌は、畢沅の『閩中金石記』に記述を確認できることから、畢沅がその拓本を収蔵していたと推察できる。後期の作品に述聖頌の特徴が多く見られることから、畢沅の幕府において述聖頌を学んだと考えられる。王潜剛の「唐碑においてはただ述聖頌のみ」との断言は正鵠を射ていよう。

孔子廟堂碑も、畢沅『閩中金石記』にその記述をみることができ。鄧石如の楷書にこの風味を看取するのは、述聖頌同様後期に集中する。おそらく孔子廟堂碑も畢沅の幕友時に学んだと考えられる。

#### 四、結び

「学書環境」という視点から鄧石如の楷書を二期に分類し、考察を試みた。その結果、先学の篆隸の影響を受けながら、前期においては瘞鶴銘・東魏碑（共に南北朝碑）を主とし、後期においては孔子廟堂碑・述聖頌（共に唐碑）をもその学書対象とした、という結論に至った。

この結論から、以下の四点のことが言える。

- ① 鄧石如は時代風潮に左右されない独自の学書姿勢を持つ。
  - ② 鄧石如の楷書には様々な時代の表現要素が含まれる。
  - ③ 先学した篆隸の影響が色濃い。
  - ④ 鄧石如の学書には環境が大きく影響している。
- ①について、当時の学書は唐碑が主であり、後に阮元の提唱により南北朝碑にも関心が寄せられるに至る。鄧石如はこれと全く相対する。つまり時代には左右されない独自の学書姿勢があつたのである。
- ②について、鄧石如の楷書は、その出自の曖昧さから様々な見解が述べられてきた。中でも、康有為は南北朝碑を称揚して唐碑を否定し、松井氏は唐碑をあげて南北朝碑の可能性を否定された。しかし、鄧石如は古典の優劣を時代の区分では判断せず、広い学書範囲の中から古典の妙味を探し求めたのである。
- ③について、鄧石如の楷書は結体のみならず、用筆そのものに篆隸の影響が見られた。趙之謙は「隸成りてこれを篆に通じ、篆成りて之を真書に通ず。」と述べたが、鄧石如の楷書には先学した篆隸の影響が色濃かつたと考えられる。
- ④について、おそらく鄧石如は、手に取ることのできる古典全てが学書対象であつたと考えられる。よって、その時々々に学んだものが書に反映されていると推察される。今回の検証は、その裏付けとなろう。

鄧石如の楷書は、様々な出自が述べられてきた。それは、彼の書が独自の境地を示していることに起因しているようである。

鄧石如の書を探るには、著名な古典だけでは語ることができない。彼の生い立ち、環境等を考慮し、その眼に映ったと考えられる古典を探る必要がある。

今回は先人の研究成果を糸口として、鄧石如の楷書に考察を加えた。これからの課題としては、彼が目にしたであろう古典を探り、そこから何を美的要素として取り込んだかを究明することである。

## 注

- (1) 「国朝書品」「安吳論書」(『中国書論大系』第十五卷、二玄社、一九八三)
- (2) 「論書十二絶句」「安吳論書」(『中国書論大系』第十五卷)
- (3) 鄧石如の篆隸について、包世臣は次のように述べる。

石鼓文、李斯の嶧山碑・泰山刻石、漢の開母石闕、敦煌太守碑、蘇建の国山、及び皇象の天発神讖碑、李陽冰の城隍廟碑・三墳記を好む……三代の鐘鼎より、秦漢の瓦当・碑額に及ぶまでを捜し、以て其の勢を縦にし其の趣を博くす。……史晨前後碑、華山碑、白石神君、張遷、潘校官、孔羨、受禪、大饗を臨する(『完白山人伝』『安吳論書』)

さらに康有為は、

今学なる者は、北碑・漢篆なり。得る処は碑を以て主を為す。(『体変第四』『広芸舟双楫』)

生平、史晨、礼器を写すこと最も多し。(『述学第二十三』『広芸舟双楫』)

と言ひ、吳育は『鄧石如篆書十五種』において、

余は初め少温を以て帰と為す。久しくして其の利病を審にす。国山石刻、天発神讖文、三公山碑を以て其の氣を作す。開母石闕もて其の模を致し、之果二十八字もて其の神を端し、石鼓文は以て其の致を鬯し、

彝器欵識は以て其の変を尽し、漢人の碑額は以て其の体を博くし、秦漢の際の零碑断碣を挙げ、悉く究めざるはなし。

と述べる。

- (4) 「述学第二十三」(『広芸舟双楫』台湾商務印書館、一九七〇)
- (5) 「尊碑第二」『広芸舟双楫』(『中国書論大系』第十六卷、二玄社、一九九三)
- (6) 「完白山人が事ども」(『書道』第五卷第八号、一九三六)
- (7) 完白は矢張り唐人の楷書が目標ではなかったのではないかと思われる。西川氏は嘗て、完白の楷書は、東魏の敬史君碑や北斉の劉碑造像の風味に近いと指摘されたことがあるが、完白の筆致が、そうした一致があるとしても、六朝の楷書はそんなに学んでいないらしい。むしろ、姿態としては、虞世南の孔子廟堂碑の風に近いと私には考えられるところである。(『鄧完白』『書品』第六五号、一九五五)
- (8) 国朝人の書は、山人を以て第一となす。山人の書は隸を以て第一となす。山人の篆書は筆筆隸より出づ。……隸成りてこれを篆に通じ、篆成りて之を真書に通ず。(趙之謙「鄧石如書司馬温公家儀跋」)
- (9) 文字の収集は、『鄧石如法書選集』(秋山書店、一九七七)、「楚辞の九歌」(『定本 書道全集』河出書房、一九五六)、「長慶集」(『書道芸術』中央公論社、一九七二)を底本とした。
- (10) 『書道芸術』(平凡社、一九七二)
- (11) 掲載古典に関しては、「崔敬邕墓誌」(『中国法書選』二玄社、一九九六)、「瘞鶴銘」(『書跡名品叢刊』二玄社、一九八九)、「敬史君碑」(『書跡名品叢刊』二玄社、一九八九)、「述聖頌」(『中国歴代石刻拓本匯編』(中州古籍出版社、一九八九)、「孔子廟堂碑」(『原色法帖選』二玄社、一九八五)を底本とした。
- (12) 北川博邦『偏類碑別字』(雄山閣、一九七五)
- (13) 鄧石如は三八才の時、江寧の挙人梅鏐の客となる。彼の学書について、包

世臣「完白山人伝」には、以下のようにいう。

山人、既に縦観するを得て、其の意を推索して、雅俗の分を明らかにす。迺ち石鼓文、李斯の嶧山碑・泰山刻石、漢の開母石闕、敦煌太守碑、蘇建の国山、及び皇象の天發神讖碑、李陽冰の城隍廟碑・三墳記を好む。毎種に臨摹すること各おの百本。又た篆体の備わらざるを苦しむ、説文解字を手写すること二十本、半年にして畢る。復た旁ら、三代の鐘鼎より、秦漢の瓦当・碑額に及ぶまでを搜し、以て其の勢を縦にし其の趣を博くす。毎日昧爽に起き、墨を研して盤に盈たし、夜分に至りて墨を尽して乃ち就寝す。寒暑にも輟めず、五年にして篆書成る。乃ち漢分を学び、史晨前後碑、華山碑、白石神君、張遷、潘校官、孔羨、受禪、大饗を臨すること各五十本、三年にして分書成る。

- (14) 此印為南部畢蘭泉作蘭泉頗豪爽工詩文善画竹江南北人皆嘖々稱之去冬与余遇於邗上見余篆石欲之余吝不与乃怏々而去焦山突兀南部江中華陽真逸正書瘞鶴銘冠古今之傑余遊山時睇視良久恨未獲其搨本乃怏々而返秋初蘭泉過邗訪余余微露其意遂以家所藏旧搨贈余爰急作此印謝之蘭泉之喜可知而余之喜亦可知也向之徘徊其下摩挲而不得者今在几案間也向之心悅而神慕者今絨若々而綬累々在襟袖間也云胡不喜向之互相怏々今俱欣々不可没也故志之石云乾隆辛丑歲八月古浣子鄧琰并識於広陵之寒香僧舎

(15) 「碑品第十七」(「広芸舟双楫」)

(16) 「鄧完白の書学」(『東洋研究』第八号、一九六四)